第６学年 特別の教科　道徳 学習指導案

日　時　令和６年１１月１日（金）第６校時
学園生　６年Ａ組　２６名
指導者　西　村　　弦

１　単元名　「どこで生まれ育っても　～差別ではなく共生へ～」
（内容項目Ｃ―(18)　国際理解、国際親善）

２　単元の目標

(1) 日本人としての自覚や誇り、我が国の伝統と文化を理解し、尊重する態度を深めつつ、自分にできることを考えるなどして、進んで他国の人々とつながり、交流活動を進めたりより親しくしたりしようとする国際親善の態度を養う。　（道徳的心情）

(2) 社会正義の実現は決して容易ではないことを自覚させ、身近な差別や偏見に向き合い、公平で公正な態度で行動できるようにする。　（道徳的実践意欲と態度）

３　大空学園の研究にかかわって

【仮説１】自国の文化と他国の文化を比較することによって、異文化を認めたり自国の文化の価値に気づいたりできるだろう。

アイヌの人々をはじめ、日本の中にも様々な文化がある一方、それらに対する差別があることを知り、より身近なところで異文化と共生する意識が必要であることに気づかせたい。

具体的資料として、他国の様子として、南アフリカ共和国やアメリカ合衆国における肌の色によって使用箇所を分けている施設の写真を提示する。また自国の様子としては、国内の空港に掲示されたポスターのメッセージ「北海道は開拓者の大地だ」を提示し、それに対するアイヌの人たちの思いを考える活動を通して、身近な問題として考える活動を進める。

【仮説２】「自分にできること」を考える場面を意図的に設定することによって、主体的に国際社会に参加しようとする態度をもつことができるだろう。

北海道、帯広市で差別に苦しんでいる人の存在を知り、身近な問題を提示することで「自分にできること」をより具体的に考えさせたい。

具体的な資料として、内閣府による「令和４年アイヌに対する理解度に関する世論調査」、北海道環境生活部による「令和５年北海道アイヌ生活実態調査報告書」、北海道大学アイヌ・先住民研究センターによる「２０１７年アイヌ民族多住地域調査報告書　帯広市におけるアイヌ民族の現状と地域住民」、アイヌにルーツのある方々への取材をもとに、アイヌの人たちに対する差別問題を提示する。

児童は、第４学年の社会科や、おびひろ学などでアイヌ文化に触れる機会は多くあったものの、アイヌの人たちに対する差別問題について知る機会は少ないと捉えている。様々な資料から客観的な情報を正確に伝えられるよう細心の注意を払いつつ、自分事として考えられるよう具体的な場面を設定する。

４　本時の目標

世界の人種差別やアイヌの人たちの歴史・文化に対する「マイクロアグレッション」をはじめとした差別問題を通して、身近にあるちがいと自分達がどう向き合い、どう行動していくことが安心できる共生社会の実現につながるかを考える。　（道徳的実践意欲と態度）

5　本時の展開

学習活動	□評価　◆留意点	●国際理解の視点
1. 人種差別に関する写真を提示し、感じたことを交流する。 2. 人種差別の概要を知る。 ＊主に黒人差別について取り上げる。 3. 人種差別的な言動をする少年の写真を提示し、なぜこのような状況になったのかを考える。		●世界で問題となっている差別について知る。
何が、少年をここまで黒人に対して差別するようにしたのだろうか。		
4. 法改正などが進められても、まだ差別が残っている現状を知る。 5. 撤去要請があった日本ハムファイターズの広告を提示し、どこに問題があったのかを考える。	◆日本ハム非難ではないことを確認する。	●前出の人種差別問題もつなげ、具体的な言動を考える。
「北海道は開拓者の大地だ」のどこに問題があったのだろうか。		
6. 撤去要請の経緯を知り、「マイクロアグレッション」を理解する。 ＊「マイクロアグレッション」 無意識の偏見や思い込みが言動に現れ意図せず誰かを傷つけてしまうこと 7. アイヌ文化について知っていることを交流する。 8. アイヌの人たちに対する差別問題を知る。 9. 身近にあるマイクロアグレッションについて考える。	◆正しい情報か確認しながら進める。 □授業での情報や考察を下に、具体的な言動を考えられたか。（道徳的実践意欲と態度：ロイロノート）	●異文化との向き合い方について考える。 ●世界の問題と身近な問題をつなげながら考える。
身近に起こりうる「マイクロアグレッション」を想像し、望ましい言動を考えよう		
10. どのような意識をもつことが、差別をなくし共生につながるかを考える。		